


令和6年9月29日
現地説明会

石清水八幡神社参道（遍路道） 五十嵐城ヶ谷遺跡



一般国道196号今治道路の開発に伴い令和6年（公財）愛媛県埋蔵文化財センターは五十嵐地区の「石清水八幡神社参道（遍路道）」および「五十嵐城ヶ谷遺跡」の発掘調査を実施してまいります。調査成果から二つの遺跡はリンクしてなり、神聖な場所とそれを支える人々の営みが見えつつあります。今回はその成果の一部を皆様と共有し、地域の歴史を考える機会として現地説明会を開催させていただきます。短い時間ですが、お楽しみいただけると幸いです。

はじめに

一般国道 196 号今治道路の開発に伴って、五十嵐地区に所在する石清水八幡神社参道(遍路道)および五十嵐城ヶ谷遺跡を現在調査中です。発掘調査は令和 6 年 4 月から開始し、令和 7 年 1 月まで行う予定です。本日の現地説明会は調査の過程で見えてきつつある成果についてご紹介したいと思います。



図 1 遺跡位置図

周辺環境

五十嵐城ヶ谷遺跡は五十嵐丘陵の四村付近において蒼社川右岸に流れる谷山川に近い裾部に位置しています。石清水八幡神社は五十嵐丘陵の頂部に位置しており、東に浄寂寺があります。丘陵の反対側には栄福寺があり、五十嵐城ヶ谷遺跡の北側には伊加奈志神社があります。このように、五十嵐城ヶ谷遺跡の周辺には数多くの宗教施設が展開しており、古代から中世、近世にかけて宗教的に重要な地域だったのではないのでしょうか。



図 2 「四国遍路霊場記」絵図

絵図から

『四国遍路霊場記』(村上護 1987) 絵図(図 2)の「村」が五十嵐城ヶ谷遺跡に、「店」が石清水八幡神社参道(遍路道)の平坦面 2 にあたるのではないかと推測できます。考古学の発掘調査では、絵図等から推測できる機会が少ないので、今回の調査は時代的なストーリーが分かりやすい、数少ない調査事例となります。



図 3 調査区位置図



図4 遺跡近景

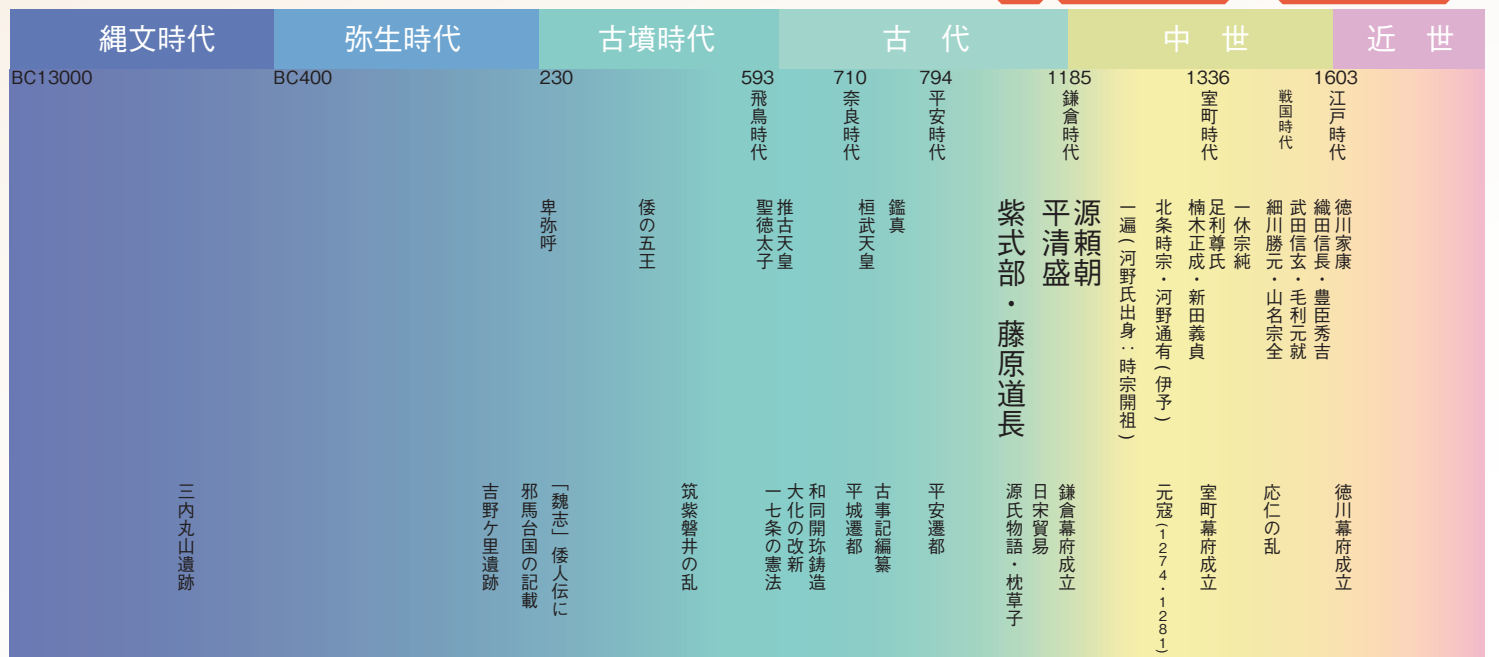
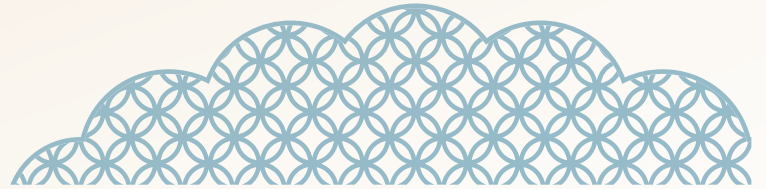
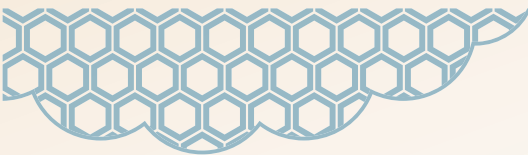


図5 年表

石清水八幡神社参道(遍路道) 門

神社の概要

石清水八幡神社は五十嵐丘陵北部に位置しており、丘陵裾部に所在する五十嵐城ヶ谷遺跡との関連が『四国遍路霊場記』(村上護 1987) 絵図(図2)および、出土遺物の時期の符合により考えられます。同丘陵北端部には伊予総社そうじゃと考えられる伊加奈志神社が存在し、石清水八幡神社本殿南方には57番札所の栄福寺が存在します。近世以降、栄福寺は石清水八幡神社の別当寺のうじゃく*注1となっています。能寂寺文書によると近世以前は石清水八幡神社の東方に所在する浄寂寺(能寂寺)が石清水八幡神社の別当寺として諸行事を執行していたことが記されています。

石清水八幡神社が文献史料上初めて記載されるのは国分寺文書の建長7年(1255)10月伊予国神社仏閣めんでんちゅうしんじょううつし免田注進状写です(『愛媛県史資料編古代中世』174号)。この文書によると、三島宮すなわち大山祇神社おおやまずみと並んでこの八幡神社の記事があげられています。それには「八幡三昧堂六丁鴨部荘仁申付由申之」とあり、能寂寺が八幡神社の法華三昧堂(別当寺)であって、領田六丁を有していたことがわかります。これにより八幡神社と能寂寺との密接な関係が推測されます。

また、保元3年(1158)に佐島・生名島・石城島が石清水八幡宮の荘園として記載されています。さらに、承安元年(1171)には玉生も記載されており、伊予国内で13世紀以前から石清水八幡宮に関連する動きが見られることや、石清水八幡神社と五十嵐城ヶ谷遺跡で出土している遺物が12世紀の一般集落では出土数の少ないものが多数見受けられることから、文献史料上に五十嵐の石清水八幡神社が記載される以前から五十嵐の地で活動が行われていた可能性が考えられます。

*注1 別当寺：神社の境内に建立された寺で、僧侶が祭祀・加持祈禱を行う一方、神社の管理を行っていた。別で本職がある者が他の職を兼務すること

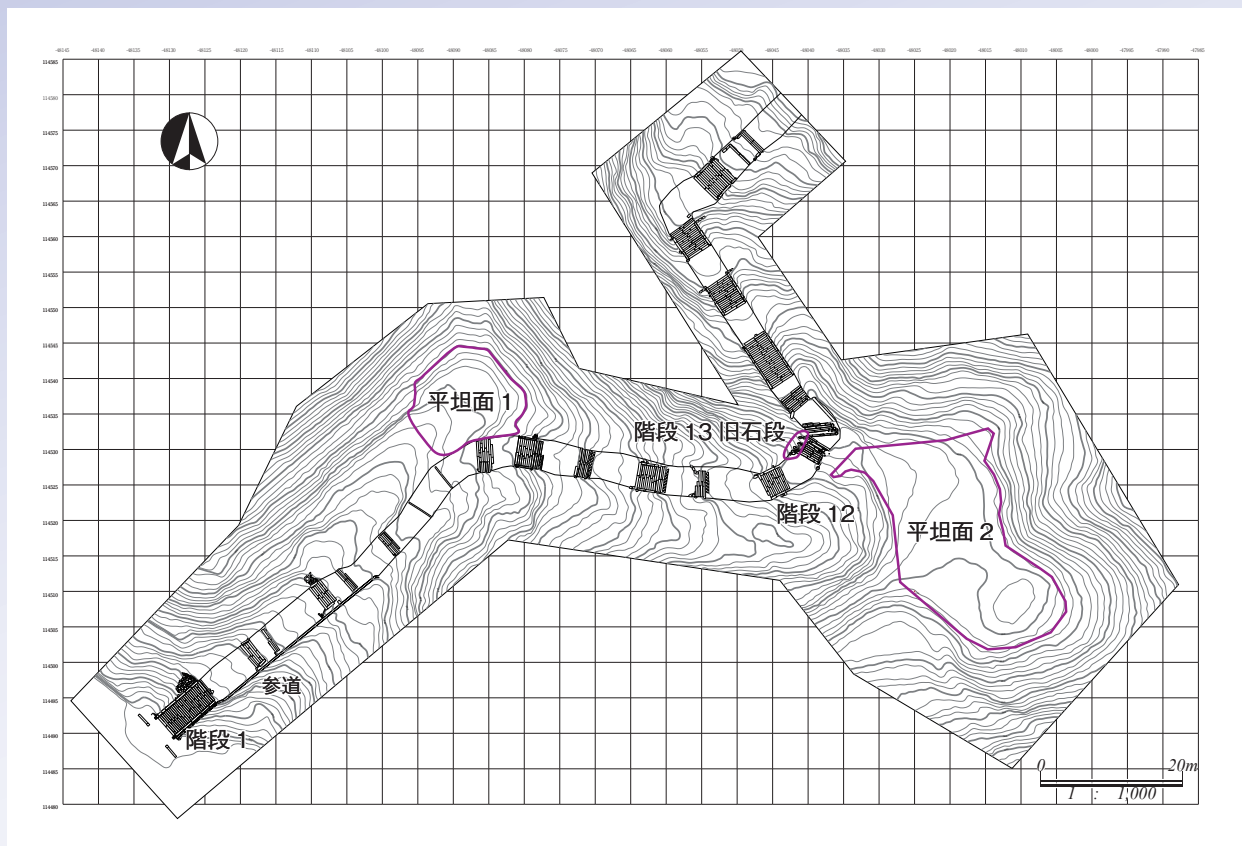


図6 石清水八幡神社参道(遍路道)地形図

調査の概要

平坦面 1(図 6 ～ 8)

神社本殿近くに形成された平坦面です。尾根状に伸びる地形を平坦に成形していると考えられます。土層観察から中世後半以降に尾根の先端の斜面を埋めて平坦面を造成していると考えられます。

石清水八幡神社関連の資料には平坦面 1 に関する記述は確認されていませんが、中世の遺物を包含する造成土から石清水八幡神社が五十嵐丘陵に勧請^{かんじょう}*注²される以前の遺物が多数含まれており、その中には古代の脚高高台付椀^{あしだかこうだい}や古代末から中世にかけての柱状高台付皿^{ちゅうじょうこうだい}などの遺物が含まれていました。これらの遺物は日常生活で使用するものではなく祭祀^{さいし}などの特別な行事に使われるものです。そのため、平坦面 1 の周辺では石清水八幡神社が五十嵐丘陵に勧請される以前から伊予総社と考えられている伊加奈志神社や国衙^{こくが}に関連する祭祀行為(宗教関連)、または前述の勧請前からの石清水八幡関連の活動が考えられます。

中世後半以降の造成土を切る形で溝(SD1)を検出しました(図8)。この溝は平坦面 1 南側の地形の高まりから流れ落ちる水の排水溝として掘られたものと考えられます。遺物が出土していないため溝の時期は不明ですが、溝の検出状況から近世以降に造られた可能性が考えられます。

*注 2 勧請：離れた場所にいる神仏に対して、こちらに来てくれるようお願いすること。新しく設けた分祀の社殿に迎え入れて祀ること



図 7 平坦面 1

勧請以前の遺物が出土した範囲



図 8 溝(SD1)



平坦面 2(図 9・ 図 10)

調査は近世面と中世面の 2 面行いました。

1 面目は『四国遍路霊場記』絵図(図 2) より「店」と推測し調査を行い、小穴 52 基を確認しましたが、積極的に建物遺構といえる状況は確認できませんでした。

土層観察から、近世段階に南東側の独立した丘陵または尾根上地形の高まりと北西側の尾根の間(地形の窪み) を埋めて平坦地形に造成していると考えられます(図 9)。

2 面目(図 9) は 1 面目を造成する際に削平^{さくへい}されており、遺構を確認することはできませんでした。

造成土の下部付近から中世前半の柱状高台・円盤高台が付く遺物が出土しています。平坦面 1・平坦面 2 共に中世の遺構は検出されていませんが、出土遺物の時期の符合から石清水八幡神社周辺で祭祀行為(宗教関連) が行われていたことが伺われます。

地形の窪み

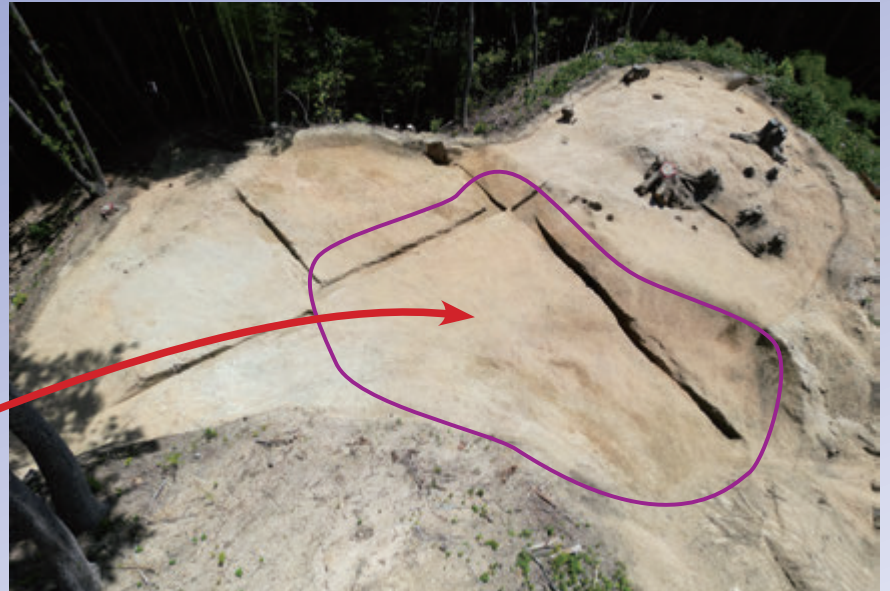


図 9 平坦面 2 (2 面目完掘状況)

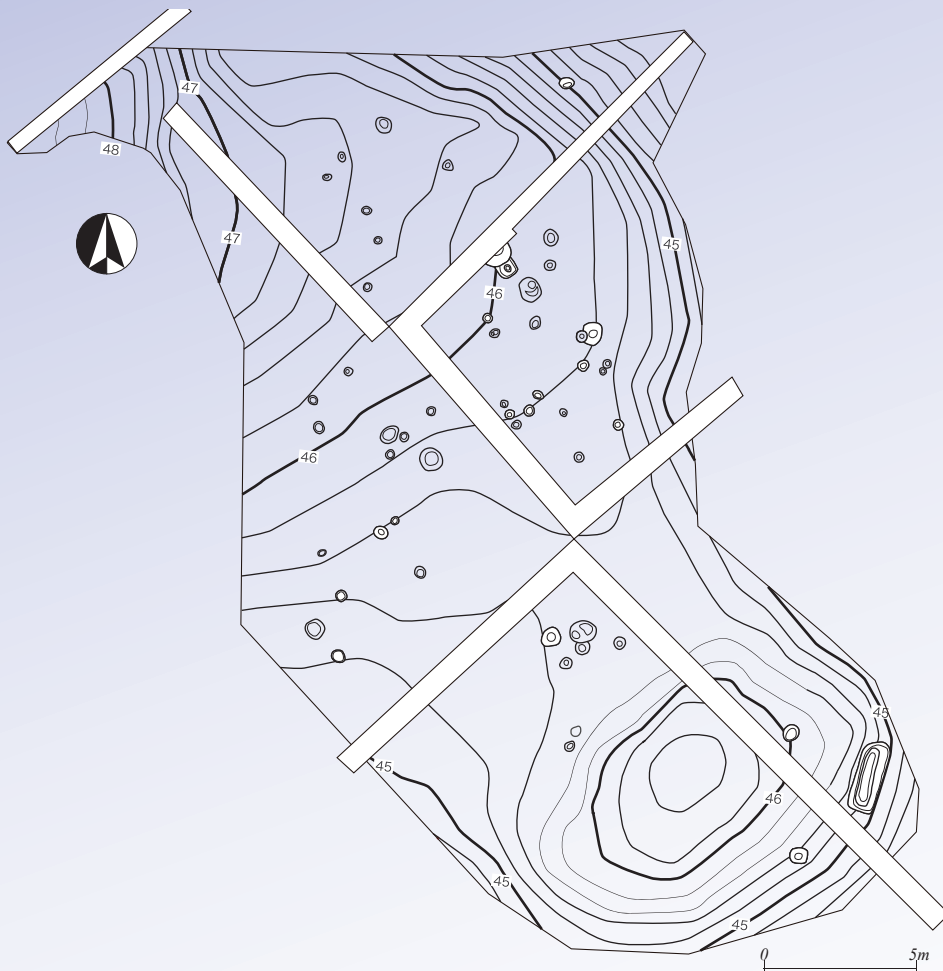


図 10 平坦面 2 1 面目(近世面) 全測図

階段斜面補強石・旧石段

昨年度参道の測量を実施するにあたり、土砂や落ち葉などに覆われている部分を取り除き、石段全体が見えるように露出作業を行いました。その際に階段脇の斜面土砂の崩落を防止するためと考えられる補強のための石積が多数検出されました。とくに階段1の斜面補強石(図13)は規模が大きなものでした。また、他の補強石の状況から、階段1の斜面補強石は造営された当時の姿を留めている可能性が考えられます。



図11 階段13

補強石に使用されている石材は花崗岩で、長さ約20～40cmを測ります。また、階段13(図11)の脇で確認した石列(図12)は上下等間隔で並べられ、石の平たい面を上に向けて並べられていることから、斜面補強用の石積ではなく参道の旧石段である可能性が考えられます。

旧石段の状況や、石材の規模の類似から、斜面崩落防止用と考えられる石積は、旧石段を転用したものと考えられます(図13～15)。



図12 階段13脇の旧石段(推定)



図13 階段1斜面補強石



図14 斜面補強石



図15 斜面補強石

参道階段の調査

参道は丘陵頂部に存在する本殿を挟み南北に続いており、参道頂上部には南北参道ともに石碑が存在し(図19～22)、碑文の字体は異なりますが、文久二壬戌四月吉日(1862)と記載がありました。

また、参道階段の石材に残る矢穴痕跡の法量計測結果から、矢穴の編年(森岡・藤川2008)から、18世紀後半以降のものであることが確認されました。この碑文の年号と

参道階段の矢穴の時期がおおよそ符合するため、文久二年に南北参道の階段が造営されたことが推測されます。

さらに、階段12側壁(図16)より側壁下端部は側壁部の裏面(図17)を凸起させ、受部となる石段(図18)を凹ませる加工を施しており、側壁の齟齬が生じない造りになっていることも確認されました。



図16 階段12側壁



図17 凸部



図18 凹部

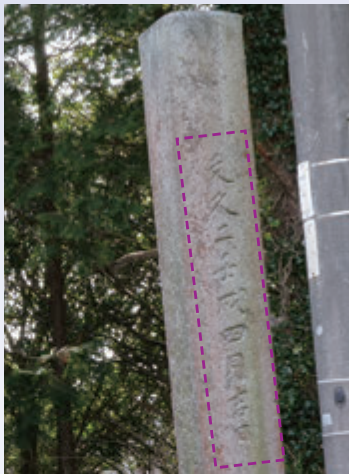


図19 南参道石碑



図20

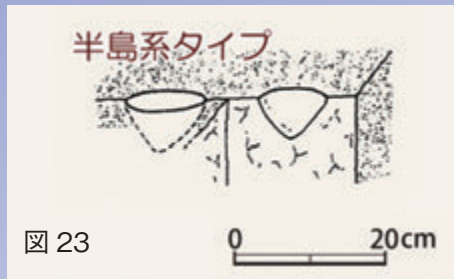


図21 北参道石碑

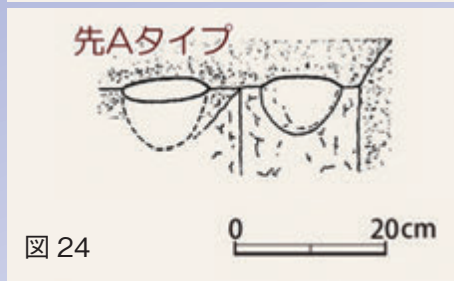


図22

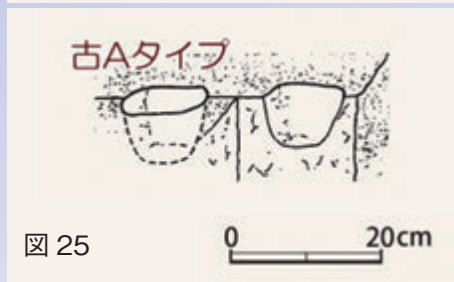
矢穴の変遷 (図 23 ~ 29)



半島系タイプ・・・百濟 7世紀前半の例
日本では未確認



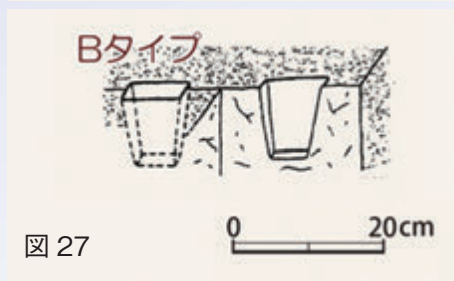
先 A タイプ・・・鎌倉時代、13世紀中頃以降
中世石造物に共通する矢穴
矢穴口 長辺 8 ~ 13cm 程度 深さ 4 ~ 8cm 程度
断面形状 「U字」・「舌状」「船底状」



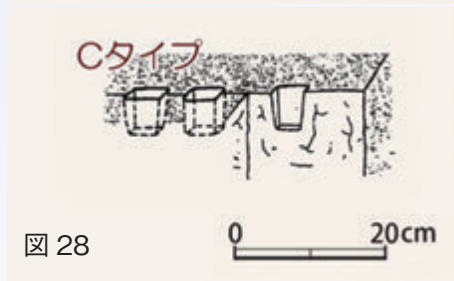
古 A タイプ・・・織豊系城郭以前の中世寺院・城郭系石垣の矢穴
矢穴口 長辺 9 ~ 16cm 程度 深さ 5 ~ 12cm 程度
断面形状 「矢穴底が丸みを持つ逆台形」



A タイプ・・・江戸時代、慶長・元和・寛永期 (1596 ~ 1644) に広く普及した近世城郭石垣の矢穴
規格的で矢穴口 長辺 8 ~ 12cm 程度 深さ 6 ~ 10cm 程度 ピッチ 1m 間隔に 7 ~ 8 個
断面形状 「逆台形」断面形状

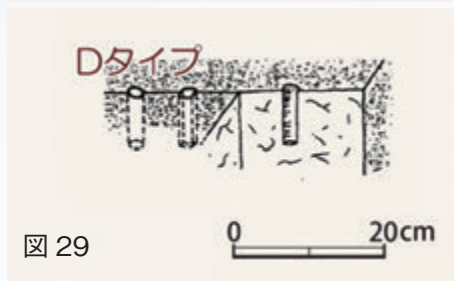


B タイプ・・・深さが矢穴口を凌ぐ長胴の矢穴
矢穴口 長辺 7 ~ 10cm 程度 深さ 15 ~ 20cm 程度
事例は少数・・・岡山県六甲島の石切場・六甲山の近世採石場・兵庫県高砂市の石造物に天保 7 年 (1836) 銘
断面形状 「逆台形」



C タイプ・・・18世紀後半以降に急増、近現代まで続く
小型で矢穴口 長辺 6cm 未満 深さ 6cm 程度
断面形状 「逆台形」「長方形」

石清水八幡神社参道階段石材の矢穴はこのタイプに該当する



D タイプ・・・小割りに用いられたや穴や削岩機によるものなど、近現代の矢穴
断面形状 「円柱形」「長方形」
断面形状 「U字」・「舌状」「船底状」

五十嵐城ヶ谷遺跡

現在までの発掘調査成果

五十嵐城ヶ谷遺跡では、調査範囲を4つに分割して調査を行っています。現在は1区の調査を終え、2区を調査中で、本日の現地説明会は2区をご覧いただきます。1・2区ともに中世末～近世(16世紀～)と中世(12～14世紀)の2つの時期の遺構が確認できました。遺跡の中心的な時期は、遺構や遺物の多

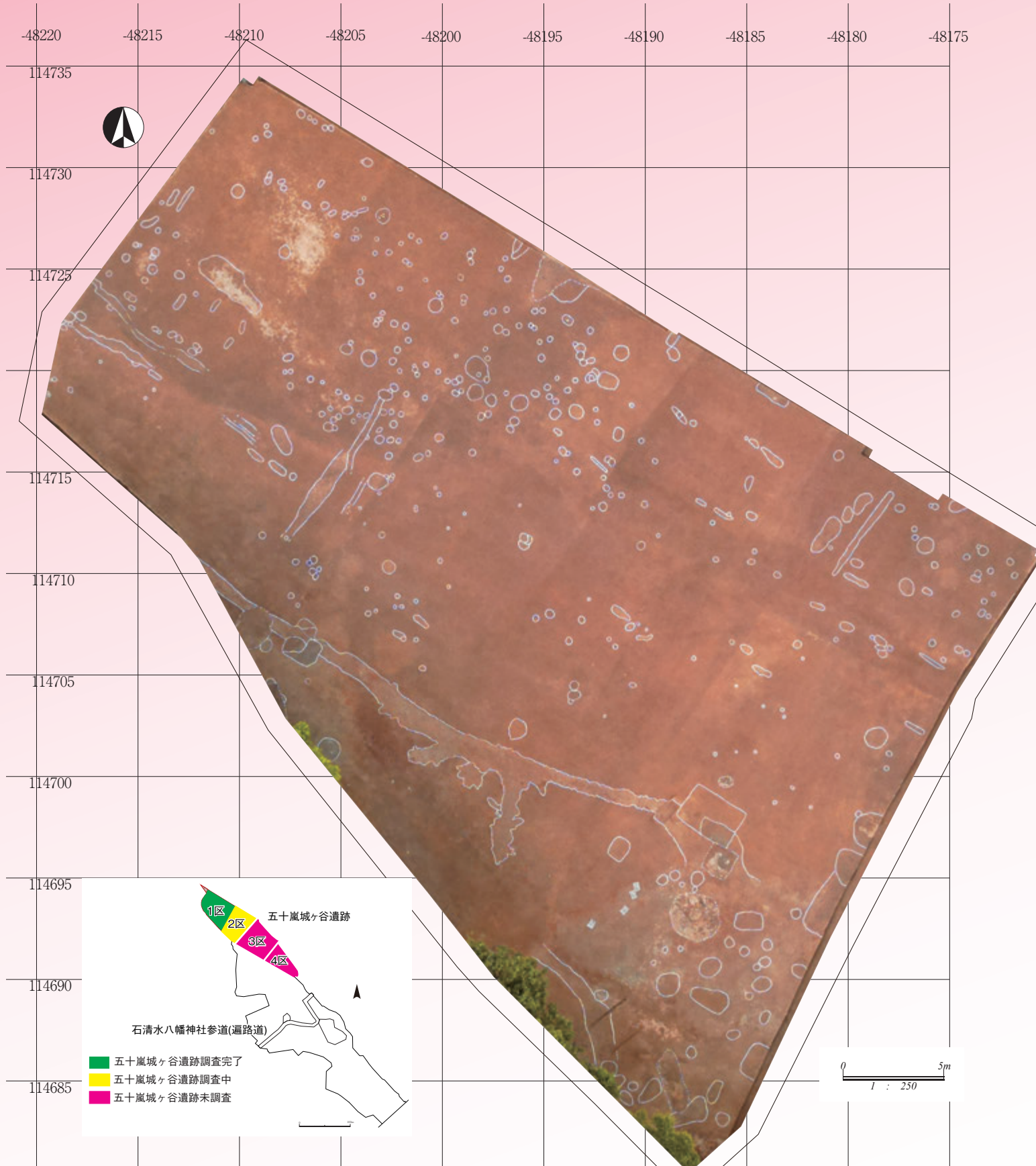


図 30 1区完掘

さから中世(12～14世紀)だと考えられます。

1区は、中世末～近世(16世紀～)の井戸や溝などが見つかりました。溝は現在の道路や用水路に平行もしくは直行しており、現在の条里がこの当時にはすでに存在していた可能性があります。中世(12～14世紀)では山裾沿いを東西に延びる溝が発見されました。山からの水を溝で受け、排水していたと思われる。また、土坑からは土釜が出土しました。

2区は遺構として掘立柱建物や溝、井戸などが見つかりました。遺構から出土する遺物から、これらは中世(12～14世紀)に使用されていたものと考えられます。伊加奈志神社や石清水八幡神社が存在した時期と重なっていることや、特異な空間配置、一般集落では出土例があまりない遺物が多数出土したことから、周辺の神社や寺に関係が強い施設と推測しています。

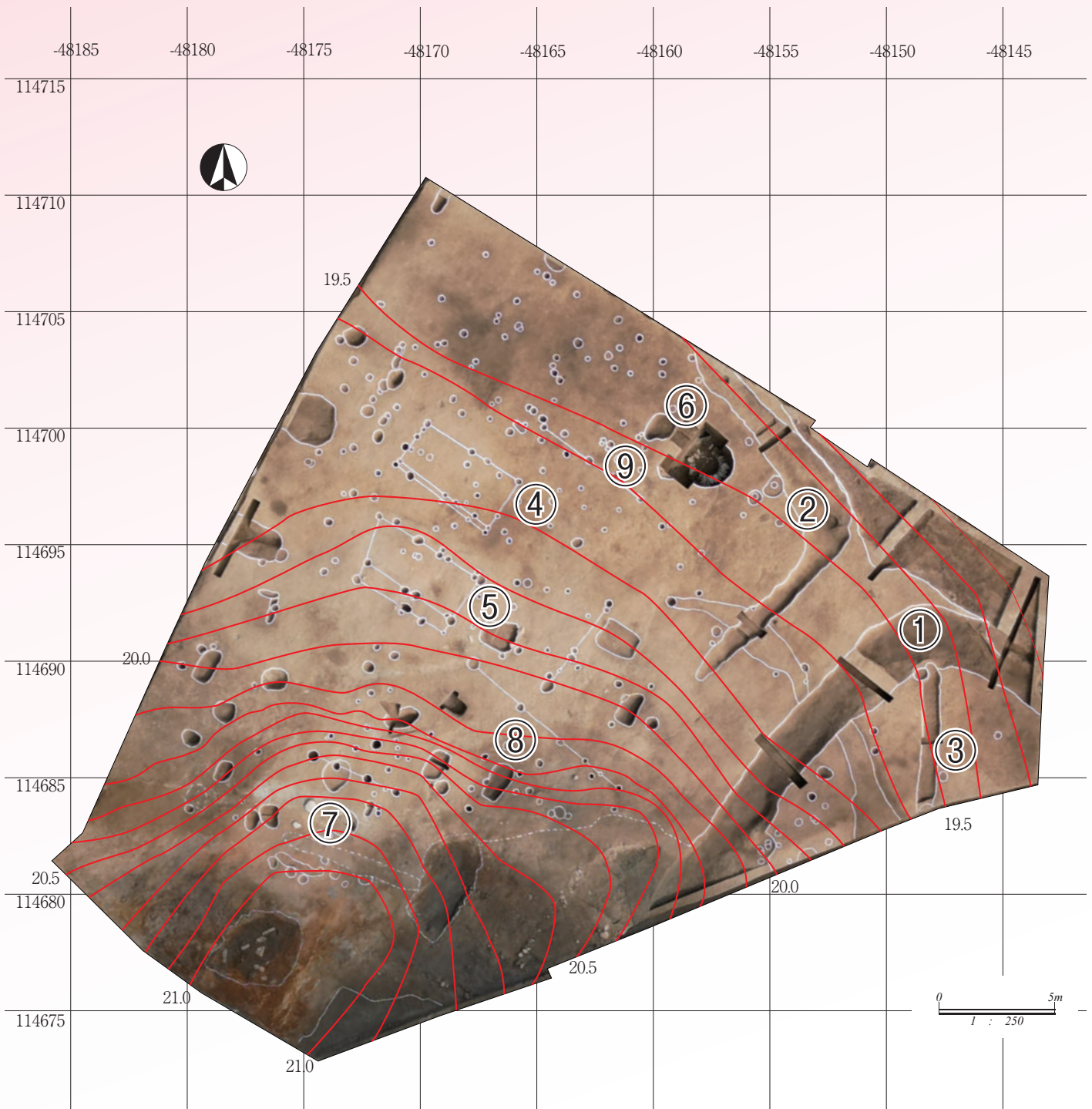


図 31 2区遺構配置

2区では、特徴的な形の2つの溝や掘立柱建物2棟、柵列、井戸、礎石を発見しました。それらの配置に注目します。

溝 (図 31-①②③, 32)

2つの溝は形が特徴的です。Lのような形と、Lを反対にしたような形をしています。対になっているようで、その間が通路のようにも見えます。これらは「溝」といっても排水目的のみで造営したのではなく、土地を区画することを主目的で作られたと考えられます。①の溝の長さは丘陵方向へ約16m、南東へ約5m、幅は約2m、深さは約0.5mと大規模です。特に長軸は調査区の端から端まで延びています。②の溝の長さは丘陵方向へ約9m、北へ約9m、幅は約1m、深さは約0.3m

と①と比べて短く、幅も狭いです。③の溝は①の溝のコーナーにちょうど位置する溝です。なぜここに溝が必要なのかはよくわかりません。

①の溝の底からは、土器と銅銭が出土しました。銅銭は土器の中に入った状態で見つかりました。このような事例は複数確認されており、今治市では他に登畑遺跡などでも出土事例があります。土器の中に銅銭が埋納する行為は地鎮ではないかと考えられています。



図 32 溝

掘立柱建物

(図 31-④⑤, 33)

掘立柱建物は2棟あり、どちらも1間×2間の作りでした。④の長辺は4.4m、短辺は2.2mで、⑤の長辺は4.8m、短辺は2.4mの大きさです。廂の柱穴ひさしも確認できました。建物と廂の間は④が0.3m、⑤が0.5mです。

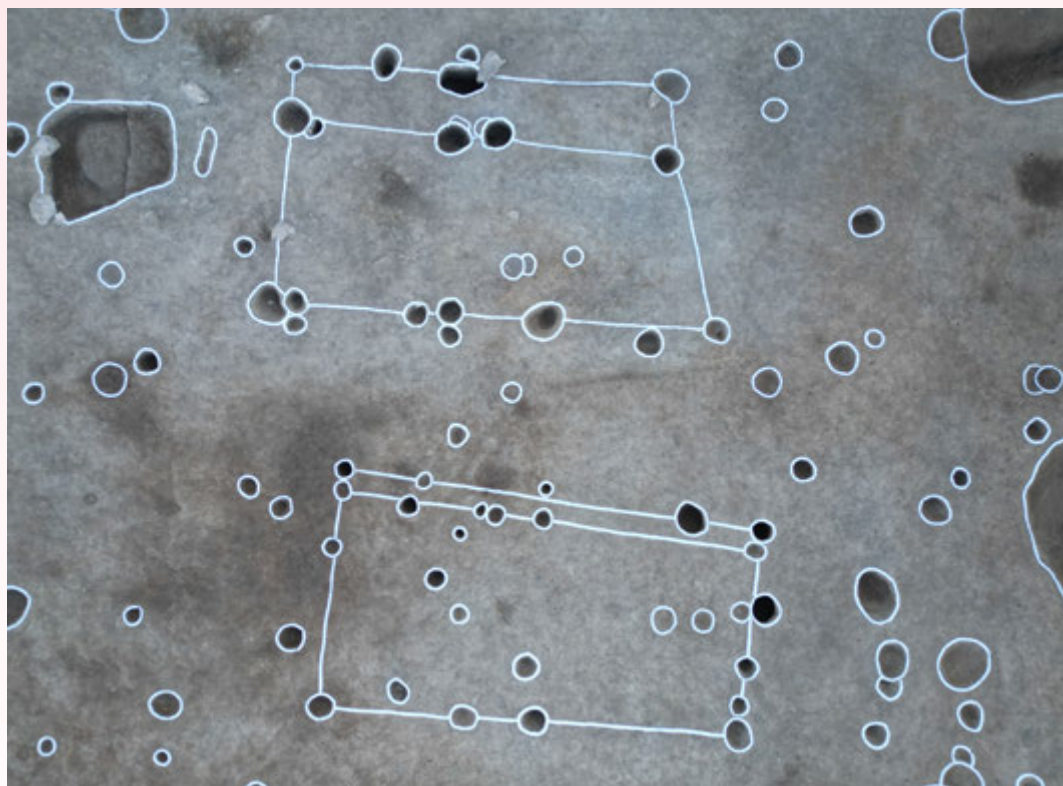


図 33 立柱建物

井戸 (図 31-⑥,34)

建物の東側には、井戸があります。石組みの井戸で、小口積という石積の方法を用いて石を組んでいます。上のあたりは、のちの時代に壊されていますが、下のあたりは残っていました。井戸の大きさは、直径約 2m、深さ約 2m 以上 (現在掘削中) です。ここで水を汲んで使っていたと思われます。



図 34 井戸掘削状況

礎石 (図 31-⑦,35,36)

丘陵に近い高まりに約 0.6 m 大と約 0.3 m 大の石があります。2 つの石が並んだ状況で見つかりました。石は上面が平坦になっており、目で見てもわかりにくいですが、触ってみるとわずかにへこみのようなものもあります。おそらく、建物の基礎に使用された石だと思われます。残念なことに、その四方に他の石は残っておらず、よくわ



図 35 礎石



図 36 礎石立地

かりませんが、掘立柱建物よりも少し高い位置に立地していることから、御堂のような重要な建物があった可能性が考えられます。

長方形の土坑

(図 31-⑧,37)

礎石の周辺に、長方形の穴が複数見つかりました。大きさは長さ1.5m、幅0.8m、深さ0.25mです。お墓などを想定して掘削をはじめましたが、副葬品や人骨などは見つからず、なにに使用した穴かはわかりませんでした。



図 37 土坑

遺構配置 (図 31,40)

2区の遺構の配置に着目します。前述の通り、2条の区画溝がそれぞれ線対称の形をして配置されており、溝の間は通路のようになっています。②の溝の内側には掘立柱建物2棟と井戸が見つかりました。②の溝は①の溝に比べて短くなっていて内部への入口のようになっています。内部の建物や井戸はそれぞれ⑨の柵で仕切られています。さらに、建物南側の一段上には礎石があり、御堂のような建物があったのではないのでしょうか。規格的な空間整備・土地利用がなされていたことがうかがえます。

遺物

○柱状高台付皿

五十嵐城ヶ谷遺跡、石清水八幡神社参道ともに「柱状高台付皿」と呼ばれる素焼きの土器が複数点出土しています。これは、一般的な集落遺跡ではあまり出土数が多くありません。今治市では、伊予国府推定地の1つとされるエリアに所在する「八町1号遺跡」や、大型居館が存在した可能性のある「経田遺跡」、松山市ではなんらかの祭祀行為が行われていたとされる「南江戸ぐじゅめ鬮目遺跡」などで出土しています。使用用途がはっきりしないこともあって、祭祀の道具ではないかと考えられています。これらの土器が使用されていた時期は、12世紀から13世紀あたりと考えられます。

○仏具模倣品？

金属で作られた仏具(鉢や椀など)を模倣して作った可能性のある土製の脚が出土しています。

○土師質土器と宋銭 (図 38,39)

①の溝で出土した土師質土器は杯という種類で、12～13世紀頃に作られていたものと考えられます。中に入っていた宋銭は「紹聖元寶」という宋(中国)のお金で、1094年以降(11世紀末)に鑄造されたものです。お金は現在と同様、古いものを使用する可能性が高いため、地鎮は土師質土器からわかる12～13世紀頃に行われたと考えられます。



図 38 土師質土器と宋銭



図 39 土師質土器と宋銭出土状況

○他の土器

柱状高台付皿以外の土師質土器として、高台のない皿や杯が出土しています。他に瓦器碗や土釜、土鍋などが出土しています。まだ調査途中のためはっきりとはしませんが、皿などの食膳具が多く、鍋などの煮炊具や壺や甕などの貯蔵具が少ない傾向にあると思われます。

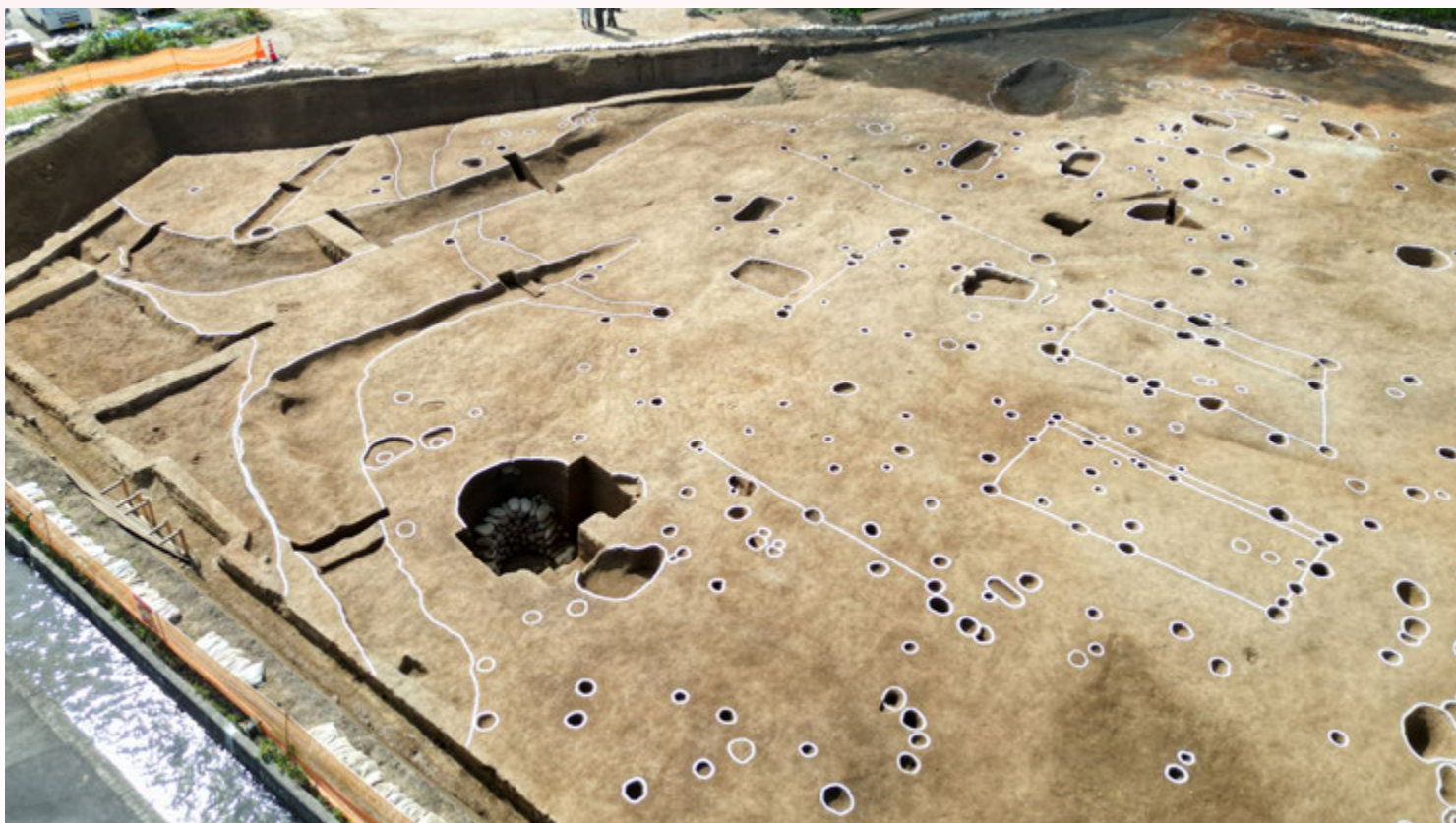


図 40 主要遺構概観

いわしぬずはちまん
石清水八幡神社参道(遍路道)・五十嵐城ヶ谷遺跡

いかなしじょうがたに
現地説明会

日時

令和6年9月29日(日)13:00~

調査原因

一般国道196号今治道路の開発

工事主体者

国土交通省四国地方整備局

調査主体

(公財)愛媛県埋蔵文化財センター

遺跡名

石清水八幡神社参道(遍路道)・五十嵐城ヶ谷遺跡

調査期間

令和6年4月から令和7年1月

調査面積

石清水八幡神社参道(遍路道):1,241㎡・五十嵐城ヶ谷遺跡:6,299㎡

遺跡の主要時期

石清水八幡神社参道(遍路道):古代・古代末~中世・中世末~近世

五十嵐城ヶ谷遺跡:古代末~中世・中世末~近世